

年齢を重ねるにつれ似た者同士で過ごすようになってきたような気がします。大学の専攻を決めた時点で似通った関心を持つ集団に所属することになりますし、仕事を選択した時点でその職業の文化の中に生きることにあります。そこで出会った友人たちとの会話は、全てを言葉にし尽くさなくても分かりあえる楽しさと、簡単に関係が壊れてしまうようなすれ違いは起こらないだろうという安心感にあふれています。

そんな心地よさが当たり前になっていた自分新しい出会いがありました。そこでの私は相手の意図が読み取れず、自分の言葉がどう受け取られているのかわからず、なにかとスムーズなやりとりができずにいました。相手の考えを理解しようと努めました。結局自分の思考回路でしか推論できず、思わぬことが起きたときどちらが正しいのかという思いに囚われてしまいます。腹を割って話ができたならもつと理解しあえると思えました。言葉

学生相談室

だより **132**

カウンセラー 森岡さやか

を交わして確かめることが分かりあうために役立つことは確かにあるでしょう。しかしどこまで伝えるのか、どう表現するのか、その塩梅だって人それぞれのスタイルがあるに違いありません。もつと意見を聞かせてほしいとお願うことはできても、意見を言うべきだと主張するのは押し付けになってしまいます。分か

らないことは分からないままに、分からないけれど確かに“何か”が存在しているということ。心を留めておくこともまた、異なる者同士が互いを尊重しながら交流する方法なのかもしれないと思えました。

分からないままのものを抱えているのは概して不安です。不安のある人付き合いは程度の差はあれ猜疑心を生じさせ、自分の存在さえも揺さぶるようなところがあります。分からないことの答えを知るためではなく、分からないことを分からないままに抱えておくためにも相談室がお役に立てればと思えます。